「道の駅」から地方創生の風を　(続編)
～茨城県内の重点「道の駅いたこ」にみる観光振興策～

筑波総研株式会社
研究員　山　田　浩　司
研究員　冨　山　かなえ

1. はじめに

現在、「道の駅」には全国で1,154駅（2019年4月時点）が登録されている。「道の駅」は、「道路利用者の休憩施設」としての従来の役割に加え、地域産物や観光資源を活かした様々な工夫が行われる「地域振興の拠点」としての役割も担っている。また、近年の度重なる自然災害時の防災拠点としての役割にも注目が集まっている。

さらに、地域活性化の拠点となる優れた企画があり、今後の重点支援で効果的な取り組みが期待できる「道の駅」については、国土交通省が重点「道の駅」として選定している。

本稿では、2019年1月、新たに県内3駅目の重点「道の駅」に選定された「道の駅いたこ」の概要や特徴、さらには、潮来市をはじめ鹿行地域の地域振興に向けた取り組みを紹介したい[1]。

「道の駅いたこ」の外観（筆者撮影）

2. 潮来市の概要

潮来市は周辺を北浦、霞ヶ浦、常陸利根川など湖と河川に囲まれた水郷地帯であり、江戸時代は、水運の要衝として栄えてきた歴史がある。

水辺には、あやめや花菖蒲、あじさい、藤などの花植物が古来より生息している。当地はこれらの花植物を整備・保全し、イベントなどへの誘客による観光振興への寄与を目的に、2017年「いたこ あやめ 花街道」として「日本風景街道」に登録されている。

また、潮来市には、約500種100万株のあやめや花菖蒲が一面に咲き誇る「水郷潮来あやめまつり大会」が開催される「水郷潮来あやめ園」、約100種1万株のあじさいが咲き誇る「二本松寺」、800年続く「潮来祇園祭禮」が行われる「素鷲熊野神社」など豊かな自然や歴史がある。

とくに、あやめまつりは、期間中に80万人もの観光客が訪れる県内有数の観光イベントとして知られている。また、水路に囲まれた潮来周辺では、その昔、嫁入り行事が舟で行われていた経緯から、まつり期間中には、全国および世界から花嫁を募集し「嫁入り舟」を開催している。

さらに、当地は成田空港・茨城空港に近く、東関東自動車道「潮来IC」経由の高速バスターミナルの終着地点という立地優位性も有している。

1　「道の駅ひたちおおた」と「道の駅常陸大宮」の取り組みについては、「筑波経済月報2018年9・12月号　研究員レポート　『道の駅』から地方創生の風を～茨城県内の重点『道の駅』にみる産業振興策～」に記載しているのでご参照いただければ幸いである。

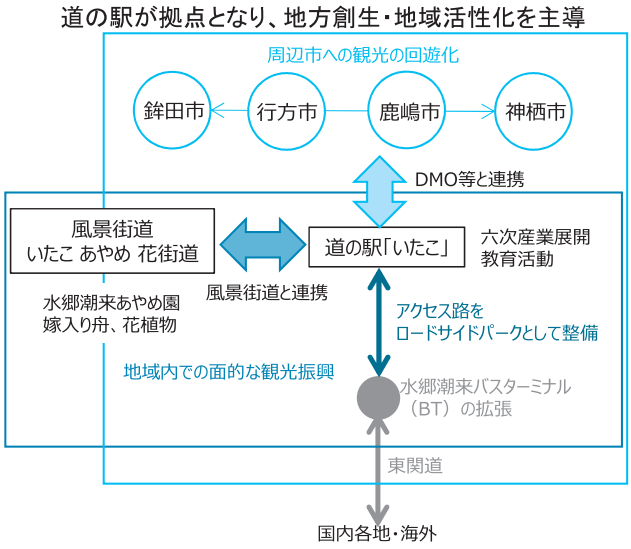
3. 「道の駅いたこ」の概要と特徴的な取り組み

(1) 概要など

①「道の駅」整備までの流れとヒアリング先

「道の駅いたこ」は、2001年8月に登録され、翌年4月に県内8番目の「道の駅」としてオープンした。2018年度の来場者数（レジ通過）は58.2万人で、年々増加傾向にあり、2018年11月には累計来場者数が900万人を超えた。

また、2019年1月には、国土交通省から重点「道の駅」に選定された。重点「道の駅」のコンセプトとして、①鹿行地域のスポーツツーリズムを核とした「アントラーズホームタウンDMO」[2]と連携し、「道の駅いたこ」を拠点とした周辺市への観光周遊化、②風景街道との連携による面的な観光振興、③平常時・災害時において、子育て世代の安心・安全の応援などを定めている。



「道の駅いたこ」の重点「道の駅」の企画内容
(国土交通省HPより抜粋)

今回お話を伺ったのは、「道の駅いたこ」の運営主体である「株式会社いたこ」（代表取締役 原浩道 潮来市長）に今年4月に新設されたまちづくり観光事業部の部長 堀内信義氏である（インタビュー実施日：2019年4月17日）。

堀内部長は、東京都千代田区神田の出身で、松戸市に在住。民間企業でブライダル関係の仕事に従事していた経歴を持っており、「嫁入り舟」の地である潮来市にも縁を感じているという。

「道の駅いたこ」の目玉商品・フォーを販売する
キッチンカーと堀内部長（筆者撮影）

②「道の駅いたこ」の整備目的と基本機能

当道の駅は、駐車場やトイレ、情報発信など従来の「道の駅」としての機能に加え、地元の農水産物を取り扱う物産販売所や地元食材を利用したレストラン、地酒やお菓子など各種加工品を販売するお土産販売所などを有している。

また、小型の風力発電による「自立型電源供給設備」を整備し、災害時に携帯電話などの充電に電力を供給できる体制を整えている。

③地元特産品を活かした販売戦略

物産販売所「新鮮市場 伊太郎」では、地元農家が生産した朝採れ野菜をはじめ、地元の食材を使用した佃煮や漬物、精肉、惣菜、乳製品、切花などの商品が販売されている。

また、レストラン「おふくろ亭」では、潮来市産のコシヒカリや地元食材を使用した惣菜など潮来の味を堪能できる。

お土産販売所「うるおい館」では、地元の農家が生産するイチゴを使ったシフォンケーキや霞ヶ浦産の水産物を使用したお菓子、潮来市内の酒蔵・愛友酒造をはじめとした県内の地酒なども取り扱っている。また、館内のお菓子工房「虹工房」では、茨城県産の米粉を使用したどら焼き「虹どら」をはじめ、ヨーグルトやジェラートなど全商品を道の駅内で製造し販売している。

このほか、関東最大級を誇るグラウンドゴルフコースを有しており、コース内の池ではザリガニ釣り（4月後半から10月末まで）ができるなど

2 「DMOとは地域の多様な関係者を巻き込みつつ、科学的なアプローチを取り入れた観光地域づくりを行う舵取り役となる法人」（観光庁HPより抜粋）

ユニークな取り組みも展開している。

④平常時・災害時における子育て世代の支援

当道の駅では、既存のおむつ交換台や授乳室に加え、2019年4月より完全個室の可動式ベビーケアルーム「mamaro（ママロ）」を設置している。

「mamaro」では、木のぬくもりが感じられる小さな個室で、授乳やおむつ替え、離乳食などのベビーケアを安全に安心して行うことができる。

また、個室であることから、災害時には女性のプライバシーを確保することも可能であるなど、平常時・災害時ともに子育て世代を支援する機能を備えている。

ベビーケアルーム「mamaro（ママロ）」（筆者撮影）

(2) 特徴的な取り組み

①潮来産米を活かした国内初の生麺フォーの提供

潮来市は早場米など米の産地として知られている。当道の駅では、地元産米の6次産業化を図るため、2018年4月、粘り気の少ない品種「夢十色」の米粉を使用した国内初の生麺フォー「モット・フォー」を売り出した。「フォー」は、ベトナムの麺料理である。国内で一般的に食べられるフォーは乾麺だが、当道の駅は「生麺」にこだわっており、国内では大変珍しい。

メニューは、ビーフ味とチキン味で、パクチーを乗せ放題で1杯500円。オプションとして生春巻きなどが用意されているほか、様々な味を楽しめるようにとナンプラーなど調味料も充実している。今後はカレー味のほか、焼きそばなど汁無しの商品開発も視野に入れている。

潮来産の米粉を使用した生麺フォー（筆者撮影）

生麺フォーは、当道の駅の人気商品「虹どら」を製造する地元の老舗洋菓子店の協力を得て開発。何度かベトナムに視察に行って本場の味を学んだほか、製麺機を輸入して製品化にこぎつけた。

また、設備導入やフォーを販売するためのキッチンカー「モット君」（P.13掲載）の導入に際しては、国の助成金などを積極的に活用した。

現在では販売数も少しずつ増加し、2019年3月末時点で累計約450万円を売り上げた。今後はネット通販や成田空港での販売など生麺の外販にも注力していく予定である。そのほか、市内の飲食業者による生麺フォーを使ったオリジナル商品の開発を促し、市全体で盛り上げていきたいとしている。

さらに、潮来市や潮来市産の生麺フォーの魅力を広く発信するため、2019年3月に開催された「第1回 茨城100ｋウルトラマラソンin鹿行（ROKKO）」の50km給水地点にキッチンカーを出店した。ランナーからは、「モチモチしていて美味しい」と大変好評だったそうだ。

100ｋウルトラマラソン出店時の様子
（写真提供：道の駅いたこ）

また、鹿島アントラーズの地域貢献事業の一環として、潮来市内に在住、在勤、在学の人を無料または優待価格で同チームのホームゲームに招待する「ホームタウンデイズ潮来の日」（今年は4月20日）では、カシマサッカースタジアム内に出店した。今後も生麺フォーの美味しさを広く発信すると同時に、鹿行地域内でのさらなる連携も積極的に取り組んでいくとしている。

②優秀な従業員が抜群のチームワークで道の駅を運営

「道の駅いたこ」では、15年以上勤務するパート社員が多いなど従業員の定着率が高いのが特徴である。堀内部長は「従業員同士のチームワークも非常に良いため、各事業を安心して任せることができています」と語る。社員の中には、自費で都内のデザイン学校に通い、当道の駅のパンフレットを自作した者もいるという。

また、当道の駅の運営会社である「株式会社いたこ」では、今年4月に初めて大卒の女性を正社員として採用した。最初から実務にはつかせず、お客さまへの接客マインドの醸成を図るために、社外の新人研修に参加させるなど、人財育成に力を入れている。

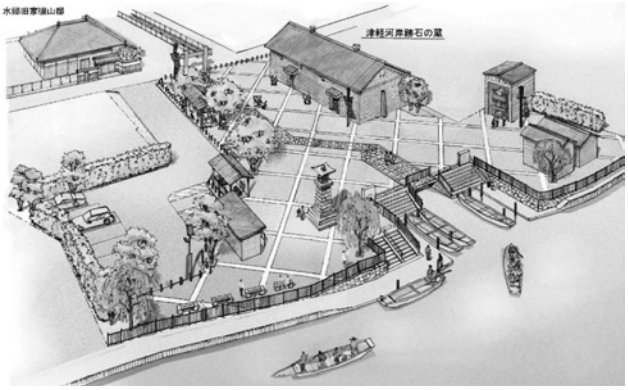
4. 株式会社いたこの経営戦略

株式会社いたこは、「道の駅いたこ」のみならず「風景街道の水辺拠点」、「水郷潮来バスターミナル」の管理・運営も行っている。以下では、株式会社いたこ全体の経営戦略について整理していく。

(1)「中期経営計画」最大の目玉・「津軽河岸（つがるがし）あと広場整備事業」で、観光振興、移住・定住促進を目指す

潮来市の中心部を流れる「前川」は、西は常陸利根川、東は北浦に合流する一級河川である。同市では、約30年前から「前川周辺整備基本構想」や「前川歴史を活かしたまちづくり実施計画」などいくつもの前川周辺整備構想が練られてきた。

2016年9月、茨城県の補正予算に河岸跡周辺の護岸整備費が盛り込まれたことを機に、前川周辺整備事業は加速。本稿ではそのうち、株式会社いたこが2018年12月に発表した「中期経営計画」（2019年～2021年）に定められている「津軽河岸あと広場」の整備計画について紹介したい。



「津軽河岸あと広場」整備事業完成予想図
（写真提供：道の駅いたこ）

①潮来市の歴史を活かした広場づくり

三方を水に囲まれた水郷潮来は、古くから水運の要衝であった。とくに江戸幕府開府以降、東北諸藩の年貢米や諸物資が潮来経由で江戸に送られていたという歴史がある。

そのため、市内を流れる前川周辺には、津軽藩や仙台藩などの蔵屋敷が数多く設けられた。その1つである「水郷旧家磯山邸」は、「水郷潮来あやめ園」から約500m下った先にある津軽河岸跡近くの日本家屋で、築120年を数える。

②整備計画のコンセプト

同計画のコンセプトは、①潮来の新しい観光の情報発信拠点、②市街ツアーの発着ターミナルの設置、③「道の駅いたこ」と連携した新たな物販拠点、④新たな水辺の食の拠点、⑤水郷旧家磯山邸を活用した宿泊サービスである。「津軽河岸あと広場」の整備をきっかけに、まちなかに新しい人の流れを生み出す仕組みが組み込まれている。

③整備計画の概要

「津軽河岸あと広場」は広さ2,357㎡で、広場に隣接する道路の向かい側には水郷旧家磯山邸が立地する。広場内には大谷石造りの「津軽河岸あと石の蔵」があり、改修後の現在、飲食・物販のテ

ナントを募集している（2019年4月17日時点）。

蔵の広さは約198㎡で、厨房などの設備も新たに整備されている。あやめまつりの「嫁入り舟」の花嫁を祝福するパーティー開催のほか、市内の交流拠点としても活用する意向にある。

なお、「津軽河岸あと広場」は、今年5月25日にオープンし、蔵については、テナントが決定され次第、営業を開始していく予定にある。

「津軽河岸あと石の蔵」の内観と案内していただいた「道の駅いたこ」の前島氏（右）（筆者撮影）

また、親水空間として前川の護岸整備も進んでいる。堀内部長は、「現在、常陸利根川から前川のあやめ園まで運行している手こぎの『ろ舟』のルートを、『道の駅いたこ』や鹿島神宮まで延伸させることも視野に入れながら、水郷の魅力を広く発信していきたいです」と抱負を語る。

現在、ろ舟の運行は4～6月、9～10月と、あやめまつり期間以外にも拡げ、春は桜、ゴールデンウィークには藤など、季節の花を見ながら遊覧を楽しめるようになっている。

④築120年の日本家屋・水郷旧家磯山邸の利活用

「水郷旧家磯山邸」は、2008年、かつての持ち主による市への寄贈後、市が地方創生事業として耐震補強改修工事を行い、2018年に休憩所として開放した。2019年4月からは、株式会社いたこが指定管理を受け、水郷旧家磯山邸の管理・運営を行っている。

水郷旧家磯山邸は木造平屋建てで、建築面積は約106㎡、3間ある和室には10名ほどが寝泊りできる。使いやすいキッチンや清潔なトイレ、ユニットバスも整備され、駐車場やWi-Fiも完備している。

水郷旧家磯山邸の宿泊料金は、休日5万円/日、平日4万円/日程度に設定する予定。今後、旅行サイトなどと契約し、広く周知していきたい考えである。

また、水郷旧家磯山邸には潮来市と商工会が導入した2台の人力車があり、観光客を乗せてあやめ園や史跡を回る仕組みを構築しているほか、「嫁入り舟」に乗る花嫁が仲人とともに人力車であやめ園へと出発する拠点として水郷旧家磯山邸が利用されている。

今後は、花嫁の家族が泊まる「スイートルーム」として、また、外国人観光客などに日本の魅力を発信する場所として、さらには、地域外の方の移住を促進する場所として機能させていきたいと堀内部長は意気込む。

水郷旧家磯山邸の内観（筆者撮影）

(2)「嫁入り舟」を秋にも運行し、「花嫁に会えるまち」として、通年型観光を目指す

「あやめまつり」は、1952年（昭和27年）に始まった歴史ある行事である。まつり期間中には、「嫁入り舟」が実施され、毎年多くの観光客の祝福が寄せられるイベントとして、全国的にも知られている。今年は29組の枠に55組の応募があるなど大変な人気を博している。また、2018年には、地域活性化センターが主催する第22回ふるさとイベント大賞で「選考委員特別賞」を受賞した。

しかし、潮来市では、あやめまつりや祇園祭禮の開催期間以外のシーズンにおいて、観光客の集客に課題を抱えている。

「嫁入り舟」の様子
（写真提供：道の駅いたこ）

そこで、株式会社いたこでは、現在、初夏のみに開催している「嫁入り舟」を秋のブライダルシーズンである10月にも運行することを企画しており、「通年型観光」に向けた起爆剤の1つにしたいと考えている。

ブライダル関係に長年勤めていた堀内部長は、「近年、和式婚礼が若い世代に選ばれる傾向にあるため、今後も需要は増えていくと見込んでいます」と語った。

5. 他市町村と連携した周遊観光への取り組み

以下では、潮来市内だけでなく、近隣市町村との連携の展望について整理する。

(1) DMOと連携した鹿行地域内の周遊化

鹿行地域は、鹿島アントラーズのホームタウンとして登録されている。2018年、鹿行地域5市（鹿嶋市、潮来市、神栖市、行方市、鉾田市）と民間企業は、「スポーツツーリズム」を核とした観光プラットフォームを確立し、交流人口の拡大や雇用の創出、地域経済の活性化を目指し、「アントラーズホームタウンDMO」を設立した。

当DMOでは、アントラーズのコーチ指導によるサッカー合宿を中心とした事業を展開している。また、合宿で訪れた人が、練習の休み時間に鹿行地域内の観光地を訪れることで周遊化を図るほか、合宿地を鹿嶋市や神栖市のみならず潮来市でも受け入れることで、鹿行地域全体に波及することを目指している。

(2) 広域バスによる広域交通ネットワークの構築

現在、潮来市内には、「鹿行広域バス（鹿嶋市⇔潮来市⇔行方市）」と「鹿行北浦ライン（行方市⇔潮来市）」の循環バスが運行しており、「道の駅いたこ」には、2路線の停留所が設置されている。

今後、「道の駅」には、公共交通機関を利用して訪れた観光客や自動車を運転できない高齢者の地域内周遊化を推進するために、観光拠点同士を繋ぐ、地域の「ハブ機能」を果たしていくことが期待される。

6. おわりに

今回、「道の駅いたこ」への取材を通じて見えてきた特徴について整理したい。

1つ目は、株式会社いたこが市内の観光拠点を一体で管理・運営することにより、スピード感のある地域活性化戦略を展開することができる点である。また、「花嫁に会えるまち」として売り出すために、ブライダルについて豊富な経験を持つ堀内部長の存在も大変心強い。

2つ目は、フォーの開発など地域産品を活用した新たな観光の目玉づくりの取り組みである。「フォー」や「生麺」という新しい切り口により、付加価値を付けて他地域との差別化を図った。これは、潮来市のほかの農産物などにも応用できると考える。

3つ目は、潮来の歴史を読み解き、津軽河岸の周辺整備を進めるとともに、前川という親水空間を市内周遊手段として再定義したことである。このほか、水郷旧家磯山邸の改修を行い、より価値の高い交流拠点としたほか、移住・定住の促進の機会を創出する場所として機能させることで、地域全体の活性化につながる重要な要素になる。

今後も、潮来の象徴である「あやめ」や「嫁入り舟」を観光の中心に置くことに変わりはないが、新しい観光資源の開発に力を入れていることは地域を活性化する上で欠かせない取り組みである。

なお、本稿が掲載される頃には、「第68回水郷潮来あやめまつり大会（5月25日～6月23日）」が丁度開催中である。「津軽河岸あと広場」や「道の駅いたこ」の大いなる賑わいを期待したい。